

タイ・カダイ諸語の言語年代学的考察

三 谷 恭 之*

A Glottochronological Study of Tai-Kadai

Yasuyuki MITANI

The following dates can be estimated for Tai-Kadai by glottochronology, time depth T being calculated from equations (1) to (3) in the text: Proto-Tai-Kadai would date back to 4000–5000 years ago. Proto-Daic and Li became distinct some 3000–3500 years ago. Proto-Daic split into Be, Lakia, Kam-Sui and Tai about 2000–3000 years ago, with the division of Kam-Tai into Kam-Sui and Tai as the latest development. Proto-Tai began to be differentiated into dialects about 1600 years ago, and the differentiation of Southwestern Tai began about 1000 years ago. Sek seems to be a Northern Tai language, which separated from other Northern Tai languages relatively early on.

シャム語すなわち最も狭い意味におけるタイ語と親縁関係のある言語は、東南アジアから南中国にかけていくつも分布し、総称してタイ諸語とかタイ・カダイ諸語とよばれている。その系統分類で最もよく知られるのが李方桂による分類である。¹⁾ 李方桂は、いわゆるカダイ諸語など関係の遠い言語については言及しないが、この語族の主要部分をなす言語についてはこれを次のように分類し、全体を「カム・タイ諸語」(Kam-Tai)と名付けた。

(1) カム・スイ諸語 (Kam-Sui)

カム語 (Kam), スイ語 (Sui), マック語 (Mak), テン語 (T'en) など

(2) タイ諸語 (Tai)

i) 北方タイ諸語 (Northern Tai)

チュワン語 (Chuang), プイ語 (Puyi) など²⁾

ii) 中央タイ諸語 (Central Tai)

ヌン語 (Nung), トー語 (Tho) など

iii) 南西タイ諸語 (Southwestern Tai)

シャム語 (Siamese), ラオ語 (Lao), シャン語 (Shan), アホム語 (Ahom), ルー語 (Lü), 白タイ語 (White Tai), 黒タイ語 (Black Tai) など

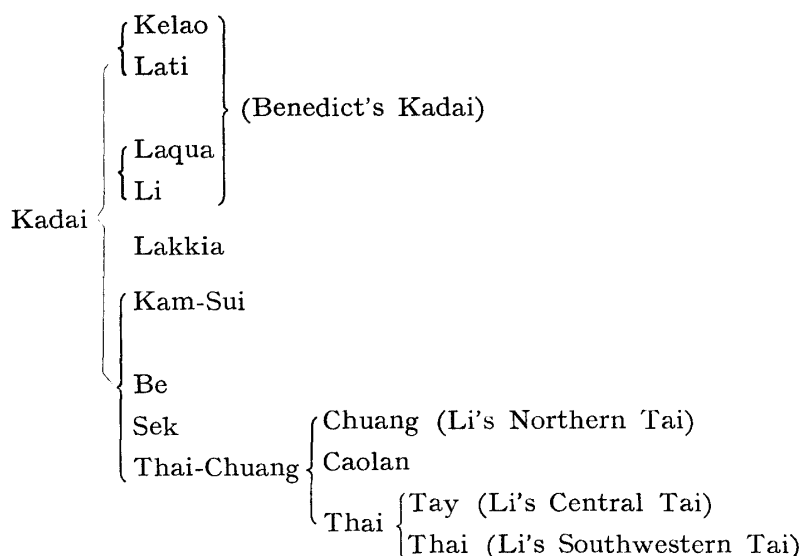
* 京都大学東南アジア研究センター

1) F. K. Li, "A Tentative Classification of Tai Dialects," in S. Diamond (ed.), *Culture in History, Essays in Honor of Paul Radin*, 1960, 951–959; 李方桂『莫話記略』1943, (1)導論。

2) 李方桂の上掲論文では武鳴, 冊亨などのようにすべて地名で挙げられている。

このうち、カム・スイ諸語は南中国の貴州と湖南の一部、北方タイ諸語は主として広西（チュワン語）と貴州（プイ語）で話される。中央タイ諸語は中国・ベトナム国境の両側に分布するが、中国ではこのグループの言語をチュワン語南部方言とみなしている。³⁾ 南西タイ諸語のグループにはシャム語をはじめ東南アジアのタイ諸語の大部分が含まれる。

ふつう「カダイ諸語」(Kadai) とよばれるのは Benedict の用法に従ったもので⁴⁾、海南島のリー語(Li)と広西・トンキンから報告されたことのあるケラオ語(Kelao)、ラティ語(Lati)、ラカ語(Laqua)を含む。しかし、Haudricourt はこの4言語を1グループとはせずに、李方桂のカム・タイ語と Benedict のカダイ諸語およびその他の同系言語をも含めた全体を仮に「カダイ諸語」と呼んで、次のような再分類を提唱している。⁵⁾



ただし、本稿では、混乱を避けるため、全体の名称としては「タイ・カダイ諸語」を用い、また、タイ諸語・北方タイ諸語・中央タイ諸語・南西タイ諸語などは李方桂の用法に従う。

さて、上のような分類がいちおうは正しいとしても、分類された各グループが一体どれくらい前に互いに分離したのか、各段階の共通祖語がどれくらい前までさかのぼるのかという点については、今のところいわば個人の勝手な想像にまかされている。そこで、それに代わっていわゆる言語年代学の方法を用いればそのような年代のごく大まかな見当ぐらいは得られないだろうか試してみよう、というのが本稿の狙いである。

といっても言語年代学はすでに批判しつくされていて、何を今さらという気がしないでもない。とくに、Swadesh の基礎語彙の残存率 $r=0.81$ という数字が、世界の諸言語から無作為

3) 袁家驊等『一九五二年僮族語文工作報告』1953；周耀文「怎样划分同一語支的語言」袁家驊等『少数民族語文論集』第一集，1958，49-55。

4) P. K. Benedict, "Thai, Kadai, and Indonesian: A New Alignment in Southeast Asia," *American Anthropologist*, Vol. 44, No. 4, Pt. 1 (1942), 576-601.

5) A.-G. Haudricourt, "La langue lakkia," *BSLP* 62 (1967), pp. 165-182.

に選んだ実例より得られたものではないため、それから推定される年代に前後どのくらいの幅を認めておけばほぼ間違いないのかが予め分からないという点はいかにも心もとない。しかし、どっちみち他の歴史的事実などとの総合判断に委ねるしかないとしても、何もしないに想像するよりよいことには違いない。

ここで言語年代学の考え方や問題点を詳しく述べる必要はないだろう。ただ Swadesh の公式による推定年代が本当の年代より一般に新しすぎるらしいことが指摘されているので⁶⁾、この点を検討しておく必要がある。Swadesh の公式は次の(1)式であった (t は 2 言語の分離後年数, 単位 1000 年, r は基礎語彙の 1000 年当たりの平均残存率, Swadesh の 200 項目では $r=0.81$; c は 2 言語の一致率すなわち 2 言語の基礎語彙中で同源語が占める割合)。

$$(1) \quad t = \frac{\log c}{2 \log r}$$

問題は、仮にその 2 言語における残存率が共に r に等しいとしても、(1)式が成り立つためには両言語の語彙変化が互いに独立であることが必要であるのに、実際には近い関係にある 2 言語は一般に互いに共通した変化を示す傾向がある、という点である。つまり、2 言語が実際には T 千年前に分離したとすると、(1)式で得られる t 値はせいぜい T 値の可能性の最下限でしかない。⁷⁾ 一方、理屈の上では上限はないわけだが、 T がある程度大きいときに 2 言語の変化が全く同じということはあるそうにないし、単に 2 言語で同じ項目の語が変わることのほうがあるうえさらに変化した項目もまた 2 言語共通して別の同源語で置き換えられること⁸⁾よりはるかに生じやすいはずだから、2 言語の残存項目が全く同じでそれ以外は異源語という場合をもって変化の共通性が最も高い場合を代表せしめてもさほど危険はあるまい。⁹⁾ その場合(1)式の考え方からすれば、 $T = \frac{\log c}{\log r}$ すなわち $T = 2t$ となる。

そこで、以上のことを次式で表わし、 k の近似値を再び経験的に求めるのも一法である。

$$(2) \quad T = kt, \quad 1 \leq k \leq 2$$

かつて服部氏によって提案された(1)式の分母を $1.413 \log r$ とする修正¹⁰⁾は、(2)式において $k=1.415$ とすることに等しい。ただ、 k が 2 言語の変化の独立性の度合に関係するものであるのにそれが一定というのも奇妙である。実際には 2 言語の地理的歴史的関係によっても異なるだろうが、一般には、分離後しばらくは 2 言語に共通した変化が多く年数が経つにつれて独立し

6) 服部四郎「言語年代学」即ち「語彙統計学」の方法について」『言語研究』26/27 (1954), 515-566。

7) 安本美典他『言語の数理』1976, 第 6 章。

8) 本来(1)式における一致率 c は共通残存語の率でなければならないが、実際には同源語が共通残存語が共通して新たに置き換えられたものかの区別がつかないため同源語の率が用いられる。

9) ただしここで考えている変化の共通性は言語 2 間に直接的な相互影響がない場合のことであって、方言連鎖や方言網の場合のように相互に影響しあう場合の変化の共通性がこれを上まわることはありうるだろう。

10) 服部, 上掲論文。

た変化が多くなると考えることができるだろう。そこで本稿では仮に k が上のような条件を活
たす t の関数であるとして、いくつかの実例にもだいたい合い、かつ数表などで簡単に計算で
きえるよう、試みに次の式で近似することにした。¹¹⁾

$$(3) \quad k = 1 + e^{-\frac{t}{2}}$$

さて、以上の準備をしたうえで、まずタイ諸語の検討から始めよう。ここで取上げた言語は
次の9つである。¹²⁾ シャム語 (Si.), ユアン語 (Yu.) すなわち北タイ語, ラオ語 (La.), シャ
ン語 (Sh.), Minot の白タイ語 (Wh.)——以上南西タイ語; Savina のヌン語 (Nu.), 李方桂
の龍州土語 (Lu.) すなわち, ‘南部チュワン語’ 龍津方言——以上中央タイ語; 李方桂の武鳴
土語 (Wu.) すなわちチュワン語武鳴方言, プイ語 (Pu.) 望謨方言——以上北方タイ語。

これらの言語について基礎語彙約 200 項目の一致率 (%) と先に述べた方法による T 値を調
べると表 1 のようになった。

表 1

	Si.	Yu.	La.	Sh.	Wh.	Nu.	Lu.	Wu.	Pu.
Si.		86	83	76	75	67	70	63	63
Yu.	0.7		90	81	83	70	73	69	66
La.	0.8	0.5		80	84	72	75	68	65
Sh.	1.1	0.9	0.9		81	70	74	65	66
Wh.	1.2	0.8	0.8	0.9		77	80	71	71
Nu.	1.5	1.4	1.3	1.4	1.1		96	72	72
Lu.	1.4	1.3	1.2	1.2	0.9	0.2		76	74
Wu.	1.7	1.4	1.5	1.6	1.4	1.3	1.1		87
Pu.	1.7	1.6	1.6	1.6	1.4	1.3	1.2	0.6	

ただし本稿のために用いた基礎語彙は Swadesh の200項目と若干異なっている。当初は Swa-
desh のものを用いようとしたのだが、少数の明らかに不適当なもののほかにも、同義語のう
ちどれを採るべきか資料からでは決定しにくい項目がかなりあって、それらを除いて別の項目

11) 服部上掲論文などの資料を用いていくつかの実例について得た結果を示す。

	t	k	T
首里方言—京都方言	1.2	1.5	1.8
英語—ドイツ語	1.3	1.5	1.9
英語—フランス語	3.0	1.2	3.6
トルコ語—アゼルバイジャン語	0.5	1.8	0.9
ルーマニア語—スペイン語	1.1	1.5	1.7

全体に見当としてはほぼ妥当な線が出ていると思う。

12) 用いた資料は次の通り。(Si.) G. B. McFarland, *Thai-English Dictionary*, 1944, ほか; (Yu.)
H. C. Purnell, *A Short Northern Thai-English Dictionary*, 1963, D. G. Collins, *An English Laos
Dictionary*, 1906; (La.) R. Marcus, *English-Lao, Lao-English Dictionary*, 1970, ほか; (Sh.) J.
N. Cushing, *A Shan and English Dictionary*, 1914; (Wh.) G. Minot, “Dictionnaire tay blanc-
français avec transcription latine,” *BEFEO* 40 (1940), 1-237; (Nu.) F. M. Savina, *Dictionnaire
étymologique français-nùng-chinois*, 1924; (Lu.) 李方桂『龍州土語』1940; (Wu.) 李方桂『武鳴
土語』1956; (Pu.) 中国科学院少数民族語言研究所主編『布依語調查報告』1959。

を追加したからである。その構成は Swadesh の A 語彙の大部分, B 語彙の約 7 割, および新たに追加したものとなっている。問題はこの場合の残存率であるが, 試みにこの語彙表で上古日本語と現代日本語(私の方言)の一致率を1000年当りに換算すると0.81, Swadesh の 200 項目について同じことおこなうと0.80となった。¹³⁾ ここに用いた語彙表のほうがごくわずかに安定度が高いことになる。しかしその差はほとんどないし, タイ・カダイ諸語の場合でも Swadesh の語彙表を用いれば印欧語の場合より心もち安定度が低いのではないかとの印象を得ているので, 全く乱暴な話ではあるがここに用いた語彙表の残存率を日本語の場合と同じく 0.81 として計算することにした。

表 1 によると, 2 言語間の関係が特に近いのは, Nu-Lu 96(0.2), Yu-La 90 (0.5), Wu-Pu 87 (0.6), Si-Yu 86 (0.7) などである。タイ諸語が南西タイ語 (SWT: Si, Yu, La, Sh, Wh), 中央タイ語 (CT: Nu, Lu), 北方タイ語 (NT: Wu, Pu) に三分されるといっても, 各グループのまとまりが同じ程度だというわけではなく, 少なくともここに取り上げた言語に関する限り, 中央タイ語はほとんど未分化であり, 北方タイ語もその内部の差異がせいぜいシャム語・ユアン語・ラオ語間のそれと同じくらいだということが分かる。それに対して南西タイ語は全体として分化がより進んでいて, 関係が最も遠いのは Si-Wh 75 (1.2), Si-Sh 76 (1.1) である。

ただ, 概算に影響するわけではないのでどうでもよいことだが, 表 1 でシャム語が他の南西タイ語よりも大体どの言語とも遠く離れているように見えるのは, シャム語にわずか(約 3%)ではあるがインド・クメール系の借用語があるためだと思われる。試みにそういう項目を語彙表から除いて計算すると表 2 のようになった。

	Si.	Yu.	La.	Sh.	Wh.
然高くなるが, シャム語以外の言語同士では表 1 の値と実質的に何ら変わらない。つまり同じ南西タイ諸語においてそれらの項目の安定度が特に高くも低くもなかったわけで, 表 1 ではシャム語においてほぼその分だけ余計に変化したものとして計算されていたわけである。 ¹⁴⁾					
	Si.	88	86	79	78
	Yu.	0.6	90	81	83
	La.	0.7	0.5	80	84
	Sh.	1.0	0.9		80
	Wh.	1.0	0.8	0.9	

ム語においてほぼその分だけ余計に変化したものとして計算されていたわけである。¹⁴⁾

表 2 によると南西タイ語内で最遠の 2 言語は Si-Sh 79 (1.0), Si-Wh 78 (1.0) である。つまり南西タイ語の方言分化が始まったのはだいたい1000年くらい前ということになる。南西タイ族がいわゆる‘大いなる沸騰’ (13世紀) の少し前頃からこの地方に移動拡散しはじめ, それと

13) 服部前掲論文でも, Swadesh の200項目について上古日本語の現代内地方言における残存率は1000年当たりで0.78~0.80となっていて, 0.81より若干低くなっている。

14) 借用語は残存語でないから同源語の勘定に際してマイナス(つまり異源語)として数えるのが普通で, 本稿でも著しく借用語の多い場合を除いてそのようにしてしまったが, 実はこれは誤っているようである。借用による語彙変化は基礎語彙中といえども意味変化などによる普通の語彙変化の法則には従わないものらしい。したがって一致度の計算では借用語の項目は空白にしておくのが安全である。

同時に方言分化が生じたと考え、おおよその見当としては合っている。今までに考えてきた諸仮定がそれほど不当なものではなかったといえそうである。もっとも、南西タイ語の中でシャム語とユアン語・ラオ語との分化が約700年前、シャム族の南方移動の開始期に当たるというのは少し出来すぎかもしれない。

南西タイ語、中央タイ語、北方タイ語の関係をみると、SWT-NT間の距離がほぼ66 (1.6) くらいで、白タイ語を除くと SWT-CT間の距離と CT-NT間の距離はそれより小さく、両者はだいたい同じ程度である。このことはタイ語の分化が SWT-CT-NT という方言連鎖の形で起こり SWT-CT間と CT-NT間のそれぞれで相互影響があった結果とも解釈できるし、Haudricourtの分類が正しければ CTとNTの相互影響が著しかったとも解釈できる。また白タイ語がやや CTに近いことを考え合わせると、白タイ語以外の SWTにおける変化が他のグループに対して独立度が幾分高かった可能性もある。¹⁵⁾

いずれにせよタイ祖語の分化はおよそ15～1600年前かその前後ということになる。その当否は確かめようがないが、4世紀頃から漢族移民による江南の開発が急速におこなわれたというから、タイ語の分化は、それがその地方にあったタイ族社会にも変動をもたらしたことの現われなのかもしれない。¹⁶⁾

次にセーク語 (Sk.) について調べてみよう。¹⁷⁾ セーク語はラオスの Tha Khek とタイの Nakhon Phanom の少数の村々で話される言語で、かつてはモン・クメール系に分類されたこともあるが、今ではタイ系とくに北方タイ語に近いものとされている。ただ初頭子音結合などに古い特徴が保存されているほか、タイ諸語の中で末尾音 -l を持つ唯一の言語であるという点で、相当古い時期にタイ祖語と分離した可能性も指摘されている。

セーク語と他のタイ諸語との一致を以前の語彙表を用いて計算すると表3上欄のようになった。

表 3

	Si.	Yu.	La.	Sh.	Wh.	Nu.	Lu.	Wu.	Pu.
Sk.	78	83	80	81	82	78	81	89	90
修正値	67	70	69	70	73	73	76	83	84
	1.5	1.4	1.4	1.4	1.3	1.3	1.1	0.8	0.8

これによるとセーク語がタイ語とくに北方タイ語に近いことは明らかである。はるか遠い昔にタイ祖語から分離してなお現代タイ諸語と8～9割も基礎語彙が一致するとは考え難い。

15) その場合表1における SWT-CT, SWT-NT の T 値は実際より幾分大きすぎるかもしれない。

16) 魏晉南北朝から唐代にかけて俚とか俚獠と呼ばれた南中国原住民がチュワン族の祖であるという説が本当なら、彼らはタイ祖語かその分化初期の方言を話していたことになるがどうであろうか。村松一弥『中国の少数民族』1973, 262-275。

17) 資料は、W. J. Gedney, "The Saek language of Nakhon Phanom province," *JSS* LVIII-1 (1970), 67-87; A.-G. Haudricourt, "Remarques sur les initiales complexes de la langue sek," *BSLP* 58 (1963), 156-163; id., "La langue lakkia," *BSLP* 62 (1967), 165-82. など。

ただ、表3上欄の数字はセーク語形の不明な約60近い項目を除いて計算してあり、そのために一致率が特別高くなっている可能性がある。もしそれらの項目のセーク語形が他のどのタイ諸語とも一致しないなら、一致率はおよそ55~63%程度になる。そういう可能性が全くないとはいえない。しかし、他のタイ諸語ではそれらの項目がそれ以外よりわずかに不安定なだけなので、セーク語においてのみそれらが全部不安定だったとは想像しがたい。表3下欄には、仮にセーク語が北方タイ語と同じ傾向をもち、セーク語形が不明な項目を除いた場合の Si-NT, Yu-NT, ..., Wu-Pu の一致率ともとの一致率（表1）との比例関係がセーク語の場合にも当てはまるものとして、それらの項目を埋めた場合の推定される一致率を示しておいた。仮にセーク語が SWT, CT, NT の平均的な性格をもつと仮定して同様のことを行ってもほぼ同じような結果がえられるので、セーク語が北方タイ語に近く、せいぜいやや古い時期に北方タイ語の主流から分離したことはほぼ間違いなさそうである。むしろ末尾音 -l の問題が謎とし残るわけだが。

さて、次にカム・スイ諸語について検討するが、資料の関係でマック語(Mk.)とスイ語(Su.)のみを取り上げる。¹⁸⁾ マック語とスイ語およびタイ諸語との関係は表4に示す通りである。

表 4

	Si.	Yu.	La.	Sh.	Wh.	Nu.	Lu.	Wu.	Pu.	Su.
Mk.	{ 51 2.3	52 2.3	52 2.3	51 2.3	56 2.1	55 2.1	56 2.1	61 1.8	62 1.8	93 0.3
Su.	65	68	67	64	71	70	71	72	73	—
修正値	{ 52 2.3	54 2.2	54 2.2	51 2.3	57 2.0	56 2.0	57 2.0	58 2.0	58 2.0	— —

ただしスイ語については、約55項目が不明なので、セーク語の場合と同様にして修正した値を下欄に示しておいた。

表4において、マック語・スイ語とどのタイ語との一致率もタイ語内の最低の一致率よりさらに低いから、タイ諸語の分化より以前にマック語・スイ語の祖語（カム・スイ祖語）とタイ祖語が分離したと考えるのが適当であろう。李方桂や Haudricourt の分類においてもそうである。NT-Mk と SWT-Mk の一致の差が約10%もあるのはいささか気懸りだが、NT から Mk への影響があったことと SWT における変化が相対的に独立度が高かったことなどの理由によるとすれば、その分離の時期はおよそ2000年前かその少し前くらいという見当になるだろう。

もっとも全く別の解釈も可能で¹⁹⁾、上のことは一つの可能性にすぎないのだが、これ以外の

18) 李方桂『莫話記略』1943; F. K. Li, "The Thai and the Kam-Sui Languages," *Lingua* 14 (1965), 148-179.

19) たとえば、SWT-CT-NT という方言連鎖の延長線上に Mk. (あるいはカム・スイ語) があるような分化の仕方である。しかしその場合 SWT-CT-NT と Mk. とが完全に分離してからかなり長い間 SWT, CT, NT がわずかの差異をもちながらそれ以上は分化しなかったと考えなければならない。

言語になると同源語かどうかの判定自体が難しくなるので、推定年代もより不確かなものにならざるをえない。取り上げた言語は、ヤオ語の一種ともされる広西大瑤山のラキャ語 (Lk.)、海南島のベー語 (Be.) とリー語 (Li.)、および先に述べたラカ語 (Lq.)、ラティ語 (Lt.)、ケラオ語 (Ke.) である。²⁰⁾

表 5

	T.	Mk.	Lk.	Be.	Li.	Lq.	Ke.	Lt.
T.		57	45	48	34	27	21	21
Mk.	2.0		46	43	36	28	20	21
Lk.	2.6	2.6		42	32	27	17	21
Be.	2.5	2.7	2.8		34	25	19	20
Li.	3.3	3.2	3.4	3.3		27	22	25
Lq.	3.8	3.7	3.8	4.0	3.8		26	27
Ke.	4.3	4.4	4.7	4.6	4.2	3.9		35
Lt.	4.3	4.3	4.3	4.4	4.0	3.8	3.2	

これらの言語を含むタイ・カダイ諸語全体に関する数字はざっと表5の通りである。ただし、タイ語 (T.) との一致は SWT-X, NT-X (あまり差はない) の平均、カム・スイ語ではマック語だけを取り上げた。また、リー語以外のカダイ諸語ではわずか80たらずの項目しか語形が分からなかったし、ラキャ語・ベー語の場合にも約50項目が不明なので、分かった項目だけを使った場合と約200項目全体の語彙表を使った場合の一致率を T, Mk, Li についてざっと調べ、その比例関係がいちおうタイ・カダイ諸語すべてについてもあてはまるものと仮定して、約200項目全体を使った場合の推定される一致率を示しておいた。さらに、同源語の判定については、疑わしいものをすべて異源語とした場合と可能性のありそうなものをすべて同源語とした場合の平均をとった。

海南島のベー語には漢語の借用語が多く、基礎語彙中にも約13%もあった。これらをすべて異源語として数えるとその分だけベー語が他から分かれた時期が古くなるわけだが、シャム語のところで見たように、基礎語彙といえども借用による変化は特別であるらしいので²¹⁾、ここではそれらの借用語を語形不明の扱いにした。

このようなわけで表5は数字自体があまり正確なものではないのだが、いちおうこれを信用して簡単なクラスター分析をおこなうと、次のようになる。まずタイ語とマック語が1グループ——カム・タイ語 (KT.)——を成し、前にも見た通り、分かれたのはおよそ2000年かそれ以

20) 資料は、(Lk.) Haudricourt, *op. cit.*; (Be) A. G. Haudricourt (ed.), *Le Vocabulaire Bê de F. M. Savina*, 1965; (Li) F. M. Savina, "Lexique d'ay-français accompagné d'un petit lexique français-d'ay...", *BEFEO* 31 (1931), 103-199; (Lq.), (Ke.) A. Bonifacy, "Étude sur les coutumes et de la langue des Lolos et des La-qua du haut Tonkin," *BEFEO* 8 (1908), 531-588; (Lt.) A. Bonifacy, "Étude sur les coutumes et de la langue des La-ti," *BEFEO* 6 (1909), 271-278.

21) 注14) 参照。

上前であった。次に KT. とラキャ語とペー語の三つがそれより上位の 1 グループ——仮にダイック語 (Daic) と呼ぶ——を成し、それらが分かれたのは 2500～3000 年前のことであつたらしい。もっとも、ペー語の位置などに関して Haudricourt の分類と合わないところがあるので、単にダイック語が 2000 年前から 3000 年前の間にタイ語、カム・スイ語、ラキャ語、ペー語などに分れたと言っておく方が安全かもしれない。

いわゆるカダイ諸語のうちではリー語がダイック語に最も近く、この二つが分かれたのは 3000～3500 年前のようである。自分で語彙を比較して得た印象ではタイ語との同系性にまず疑いがないのはここまでである。(逆にその意味でリー語をも含めてダイック語と呼ぶほうが便利かもしれない。)

残りの 3 カダイ諸語のうちではケラオ語とラティ語が比較的近く、ダイック語とリー語の分離期とほぼ同じ頃に二つが分かれたらしい。資料の質が高くないためでもあるが、この 2 言語とタイ諸語との同系性は決して Benedict のいうほど明らかではない。しかしいま一つのカダイ語であるラカ語がダイック・リー語ともケラオ・ラティ語とも共通の語彙があることは確かで、ラカ語を真中にした方言連鎖が考えられるならば、これらの全体がタイ・カダイ語族を形成する可能性は確かにある。おそらくその比較言語学的方法による証明は困難であろうが、もしそれが正しいとすると、タイ・カダイ祖語はざっと 4～5000 年前までさかのぼるというわけである。むろんこれらの数字がどの程度に信頼できるかは、他の系統の言語との関連や考古学的事実などとの総合判断に委ねなければならない。